文は一樣に扱はれ、且歐米の部も同一分類に依つて並べられてある。論文目錄に於ける斯る試みは本書が始めてであり、彼此の對照に甚だ便利であつて相當の成功を收めて居ると云へる。なほ、昨年支那から出た「國學論文索引四編」には約二百種の雜誌が收められてあり、それに比べると本書の五十五種は大に劣る樣に見えるが、二百種の內には昭和十年中に發行されなかつたものもあるし、とるに足らぬ小雜誌もあるから、採錄を望むべきものは皆無とは云はぬが、殆んど無いと云つて宜い。歐米の部に就て云へば、コルヂエの「支那書誌」以後の適當な目錄がなく、我々は頗る不便を感じてゐたのであるから、本書の續刊によつて或る程度の便宜を得る事が出來るであらう。

次に分類の仕方に就て云へば、標準が非常に嚴密で脫落や過誤が少く、此の點本書は大に誇つて宜い。項目の立て方は恐らく編者等の最も苦心を拂はれた所であらうが、大塚史學會の「東洋史論文要目」が支那、朝鮮、滿蒙、臺灣、南海、西域、西藏、印度と地域に依つて大別して更に子目を分つに對し、本書は先に述べた樣に十九門に分類して更に子目が立てられ、各目の內に於て地域別に排列されてあつて、好箇の對照を爲してゐる。兩者とも夫々得失があり、其の可否を定めて了ふ事は難けるが、一言氣づいた事を云へば、日本支那の部、十二考古學「青銅器時代」以外に十一美術史「工藝」の項に銅器に關する論文があり、又、十四民族學「信仰」の項の外に七宗敎史に「支那古代宗敎」なる項が立てられて居る如きは編者等の一考を煩はしたい。尙、一論文は一箇所にだけしか載せてないので、所要の論文を檢出し得ぬことも起るが、斯る場合には「著者」索引が多少役立つであらう。

第三は附錄の「批評紹介」である。本書前年度版には、論文の題目と共に其に對する批評をも併記して好評を博したのであるが本書は單行文獻を採錄しなかつた代りに此の批評紹介の目錄に依つて、九年度發表の論文に對する十年度刊行物所載の批評を補ひ同時に單行文獻目錄としても役立てたものである。本書が同研究所々藏のものゝ目錄である以上、單行文獻に就いては完全を期する事は望み得ないが（殊に外國のものに於て）、斯樣に何れかの雜誌が批評なり紹介なりした文獻、云ひかへれば一應は學界が取上げた文獻のみを採錄した此の試みは、甚だ注目すべきであると思ふ。歐米の部の著者索引には此等單行文獻の批評者の名が出てゐるが、これはむしろ批評された文獻の著者の名を出した方が、今述べた樣な意味から云つて却つて便利だつたのではあるまいか。

以上が本書の特色の大要であるが、前年度版より一段と洗練されたすがたで本書が世に送られた事は慶賀に堪へない。今後とも續刊され更に充實されん事を切に望む次第である。（東方文化學院京都研究所發行、四六倍判、一三六頁、定價九拾錢）（藤枝晃）

フリヨドリヒ・マイネッケ

「歷史主義の成立」二卷

歷史主義の問題は、唯單に專門的に歷史を學ぶ人々にとつてのみならず、凡そ現代に生きて何事かを考へ、何事かを語らんとする人々にとつて、關心に價する重大な問題でなければならない。

何故なら、十九世紀思想の洗禮を受けた現代の人間の思惟方法は――たとへ多くの人がこれに無意識であらうと――その根柢に於いて歴史主義的な Lebensprinzip に制約されてゐるからであり、しかもかゝる歴史主義は、例へば K. Heussi が既に一九三二年に書いた如く、「危機」に臨んでゐるのであるから。

マイネッケは、此處二三年來、歴史主義とその危機の問題に沒頭してゐたやうである（本誌、二十一卷・三號紹介欄參照）。彼が本書――或は少くともこれに類したなんらかの勞作を公にするであらうことは、既に豫想されてゐたところであつた。十九世紀獨逸史學の傳統を代表する此の老大家が、「危機」に在ると云はれる歴史主義の問題をば、どの樣な立場に於いて取上げ、どの樣な解決の道を與へるか――これは、單に限られた一部の專門家のみの興味に價する事柄ではない。勿論、マイネッケ自身も云つてゐるやうに、現在に於いては、「肯定的な意向でものされた歴史主義成立史を書くことは冒險であるやうに思はれる。何故なら、今や既に數年來、歴史主義は克服されねばならぬと云ふ叫びが響き始めてゐるからである。」而も、彼は今此の「冒險」を果さうと云ふのである。

マイネッケによれば、「歴史主義の出現は、曾て西歐思想の經驗せる最も偉大なる精神革命の一つであつた。十八及び十九世紀の精神史は、廣く歴史主義の歴史である。」しかし歴史主義と云ふ言葉によつて何が理解さるべきであるか。彼によれば「歴史主義とは、先づライプニッツからゲーテの死に至るまでの獨逸人の偉大な運動の中に於いて得られた新しい Lebensprinzipien の、歴史的生への適用と云ふことに他ならない。」そして「此の運動は、西歐全般の運動を繼續せしめ、王冠は獨逸精神の上にくだつた。獨逸人は、此の點に於いて宗教改革に次ぐ第二の大偉業をなしとげたのである。併し、それは獨逸人が見出した新しい Lebensprinzipien 一般に他ならないが故に、歴史主義は、また單なる精神科學の方法より以上のものを意味する。若し人が彼の眼を以て世界や生を眺めることに慣れるならば、世界も生も異つたものゝ如く見え、それらはより深き冥々の根柢をば啓示するに至る。」

だが、「歴史主義の核心は、歴史的・人間的生の、一般化的考察の代りに、その個別化的考察を置き換へると云ふ點に存する。」歴史主義の出現以前に於いては「歴史の最も內面的な動力たる、人間の Seele と Geist とが、一般化的判斷のために破門に處せられてゐた。」歴史主義は、此の破門を解かうとするのである。それ故歴史主義は「理性と情熱、德と罪とを有する人間が、吾々の知れる限りのあらゆる時代に於いて、常に同じ根柢に在つた」となす「自然法的思惟方法」とは、鋭く對立する。後者は「古代以來（人心を）支配し、人間の本性――特に人間理性の固定性をば人の心に刻みつけた」ものに他ならない。

かゝる根本的に對立する二つの思惟方法――これの混融は、十九世紀を俟たねばならない。「十八世紀後半に於ける歴史主義の發端は、未だ僅かに混淆と破碎、新しいものゝ迸出と相並んで古きものゝ沈滯」を示すにすぎない。けれども「此の時以來、恐らくは歴史主義は、近代思想の成分となつた。そこで注意深い觀察者は、人間の形成物に對する殆んどあらゆる本質的批判の中に歴史

主義の痕跡を感じうる程である。」

然るに、現代はもはや十九世紀ではない。十九世紀の人間の Lebensprinzip に根を有つてゐた歴史主義的思惟方法は、現代に於いてはすでに非難と攻撃とにのみ價するものとされがちである。人々は「歴史主義は振り處なき相對主義にまで(吾々を)導き、人間の創造力を毀行せしめる」と考へる。マイネッケ自身も「今日歴史主義に對する傾聽が、唯極く僅かな人々に於いてのみ見出され、多くの人々に於いては見出されない」ことを知らない譯ではない。それにも拘らず、彼は「歴史主義が、人間事物の理解に於ける從來到達された最高の段階であると考へ、且つ歴史主義が、吾々を取圍み或は吾々の眼前に横たはつてゐるところの人間歴史の諸問題に向つてもまた純正な發展能力を有つものだと望を嘱する」。彼は「歴史主義が、價値の相對化によつて打加へた傷をば醫すだけの力をそれ自らの中に具へてゐるものだと確信する――但し、歴史主義が、此のイズムをば純正な生に置換しうる人間を見出すことを前提として」。

此の樣な基本的態度を以て、彼は「歴史主義の成立過程をば、西歐の精神の發展段階として叙述せんと欲する」。彼のとらんとする叙述の方法は、「哲學的な思想家や體系的な個別科學から出發せる思想家が好んで選ぶ道」即ち「概念的に把捉された一般的な問題そのものを前景に置き、個々の思想家の受持分をば一つの純粋な問題史・理念史に織りなす」方法ではなくて、「純粋な歴史家の道」即ち「生ける人間の許にまで立至つて、これらの人間に於いて理念の變轉を研究する」方法である。何故なら、彼によれば歴史主義の成立は「個性的組成に於いて把握されねばならない」からである。斯くて「素材の選擇は、三人の偉大な獨逸の思想家に向つて求められた」。ユスツス・メーゼル、ヘルデル、ゲーテの三人がこれである。本書第二卷の大部分(第八・九・十章)は此の三人に捧げられてゐる。そしてマイネッケは此處に力點を置いた。「何故なら、十八世紀の早き歴史主義が此の上なく強き迸出にまで立至つたのは、此の三人の大思想家に於いてであり、而も彼等の業績は、歴史主義のその後の生長のための地盤となつたからである。」

けれども、此の三人は先驅者を有たなかつたわけではない。シャフツベリ、ライプニッツ、アーノルド、ヴィコ等が歴史主義成立のための準備者の役割を果し(第一卷・第一章)、次にヴォルテール、モンテスキュー及びその時以後のフランス思想(第二・三・四章)、更にイギリス啓蒙史學(第五章)が夫々その思想的祖先の位置を占める。しかもマイネッケは、第一卷・第六章に於いて「從來殆んど評價されることのなかつたフランス及びイギリスに於ける prüromantische Regung をば(歴史主義の)前段階として且つはとりわけヘルデルに對するその意義の爲に叙述し、此の際 Burke をも除外しなかつた。唯 Burke は、(獨逸の)三大思想家の後に來るところの、歴史主義の其後の發展に對して始めて重要なものとなつたのではあるが」。

マイネッケの最初の計劃では、此等のものを叙述して後、「若きランケの Bildungsgeschichte を以て終る」豫定であつた。併し、本書の中ランケに就いて述べてゐる部分は、僅かに卷末に附せられた Beigabe だけである(一九三六年一月二三日、Preussische

Akademie der Wissenschaften の Friedrichstag に於けるランケに對する追悼講演の再錄)。

もとより、本書は、歷史主義の成立を歷史的に叙述したに止まる。從つて、十九世紀に於ける歷史主義の開花——更に今世紀大戰後に於けるその破綻の叙述を本書に求めるのは無意味である。しかし、成立の問題が同時に本質の問題でありうる場合が少くない。そして、歷史主義もまた、かゝる場合の一つであるやうに思はれる。歷史主義の破綻が、かへつて人を歷史の問題に強く惹きつけてゐる現代に於いて、類書の少い本書の如きは、少くとも退化せる歷史主義の克服と新しい歷史意識の誕生に關心を有つ人々にとつて、必讀の書の一つであることを信じて疑はない。(Friedrich Meinecke; Die Entstehung des Historismus. 2 Bde. S. 656 München und Berlin, 1936. Verlag von R. Oldenbourg) (邦貨約貳拾圓) (中山)

彙報

○京都帝國大學文學部史學科

昭和十二年度卒業論文題目

國史專攻 (二十名)

戰國時代の本願寺とその教團の統制組織　天野　義靜

堀川學派の思想史的考察　鵜井　伸明

平安朝末期に於ける貴族の生活意識　木越　宏

室町社會と庶民の精神傾向　白濱　大次

德川時代の農村と農民の生活　鈴木　光次

中世商工階級の一考察　高谷　重夫

近世初頭の民政　土井　彬

幕末に於ける讃岐高松藩の制唐業　永田　蕃

中世初期武士集團の思想特に集團意識としての個人意識の伸展　錦織　透

農民生活の歷史的展開　平山敏次郎

平安末期の社會相　平山　久

中世末期に於ける商業　深谷芳太郎

幕末薩藩の諸事情　藤谷　俊雄

維新志士の處世觀 (義擧に關係せる志士を中心として)　松岡　健一

鎌倉武士に於ける信仰の一考察　松村　功

近世社會と庶民の教育　松山　國義

大阪川口新田の研究——德川時代に於ける町人請負新田の本質に就いて——　前橋　正二

中世後期に於ける教育の時代的變遷　宮崎　克己

鎌倉時代國民文化の基礎事實　村山　修一

國學に於ける復古的傾向　山口平八郎

東洋史專攻 (六名)

後魏初に於ける漢族に就いて (特に鮮漢關係)　岡田芳三郎

佛教移入と漢末社會の諸事象　岡村道三郎